学校教育実践学研究，2024，第30巻，1－8頁

フィリピンでの児童虐待防止ペアレントトレーニングの効果
―支援実施者と対象児童への効果を中心に―

池田　いぶき*・栗原　慎二

（2023年12月4日受理）

The Effectiveness of Child Abuse Prevention Parent Training in the Philippines
-Focusing on the Effects on Support Providers and Target Children-

Ibuki Ikeda and Shinji Kurihara

Abstract: Although various programs have been implemented in the Philippines to support street children, it is believed that not enough has been done to develop human resources to support street children and their parents.Therefore, this study developed and implemented a training program focused on developing resilience, attachment, and parenting skills of parents of street children. The program consisted of a total of 12 90-minute sessions, held every 2 weeks for 6 months. Evaluation was conducted by means of a questionnaire administered to participants at each session and a post-program interview. Semi-structured interviews were also conducted with the local staff who ran the training program. The results showed that the program improved the support skills of the parents and had a positive impact on the children. Changes were also observed in the support staff in four areas: improved self-awareness, assessment skills, motivational attitudes, and analytical skills. In the discussion, factors that made these changes possible are discussed.

Keywords: parent training, staff training, resilience, attachment, parenting skills

1　研究の背景と目的

1－1．フィリピンにおける貧困の実態

Recognition, Validation and Accreditation in Philippines（2023）によると，920万人のフィリピン人のうち4人に1人（25.8%）が貧困状態にあり，400万人のフィリピン人児童・青少年のうち10人に1人が学校に通っていないと考えられている。フィリピンの中途退学率は24.2%で，東南アジアで最も高い水準にある。何とか学校を卒業した人々も，失業率（6.6%）と不完全雇用率（19.5%）の上昇に直面している。

1－2．世界における家族の実態

ユニセフ（2017）は，家族と離れて施設で暮らす子どもたちについて，子どもにとっては家庭的な環境における養育が最善であると考えられるものの，家庭崩壊，健康面の問題，障がい，貧困などの理由で，家族がいるにもかかわらず，施設に保護されている子どもが大勢いること，家庭は子どもたちを守る環境が整っている場所であるはずにもかかわらず，しつけと言う形で子どもたちが暴力を経験する場ともなっていること，実際に37カ国からのデータによると，2歳から14歳までの子どもたちの3人に2人の子どもたちが体罰を受けていること，86パーセントが，体罰と心理的な攻撃の両方，あるいは一方を経験していること，などを指摘し，こうした子どもの発育に関する懸念が，世界各地に広がっているとしている。

この課題から，できる限り安定した家庭環境を作り出す必要がある。そのためには親に対するスキルトレーニングが効果的であると考えられる。こうした状況はフィリピンでも報告されており，

* 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期

子供たちは厳しい状況にある。

1−3. ペアレントトレーニングの必要性

フィリピンの親の置かれている現状について，西垣（2021）は次のように指摘している。

まず，フィリピンの親はシングルマザーや刑務所にいる親，病気の親，ネグレクトする親など，必ずしも一様ではなく多様な状態にあること，また，貧困からの影響として，子供の要求に応えられないといった子どものケアへの負の影響，子どもの教育への負の影響，夫婦関係への負の影響，家庭設備への負の影響，親の精神面への負の影響など，多くの負の影響があることを指摘している。また，多くの親は子育ての参考になる人がいないこと，家族のことは誰にも相談しないこと，多くの親がソーシャルサポートを得ず，孤立した子育てを行なっているようであること，その一方，子育ての相談の経験がある親はソーシャルサポートのありがたさを実感しており，親のソーシャルサポートのニーズの高さが示唆されることを指摘している。さらに，具体的に必要な支援としては自己統制，親子の愛着形成，家族の良好な関係づくり，財政管理，職業訓練などを挙げている。

1−4. 現地の人材育成の必要性

アジア開発機構（2007）はフィリピンの非政府組織（NGO）および市民社会組織について以下のように述べている。

フィリピンにおける市民社会組織は世界的に見ても活発で，人口あたりの NGO 数はアジアで最も多く，国際的な NGO の本部も多く設置されている。フィリピンにおける市民社会団体の数は，50 万にのぼると推定されているが，NGO として登録している数は，3,000 から 5,000 の間とされている。このように多くの海外の NGO 団体が教育をはじめとした様々な分野でプログラムの開発が行われている。教育分野では，生活向上，社会保障，金融包摂，人材育成や職業訓練である社会的エンパワーメントを含む包括的なプログラムを作成し，人材育成面では事業計画とマネジメント，金融教育，会計などに関する訓練が行われたりしている。

しかし，第二著者がマニラで 2021 年に行なったワークショップの参加者やフィリピンに滞在している NGO スタッフによれば，フィリピンでも多くのトレーニングが行われているものの，さまざまな問題の原因の分析は不十分であること，多くのプログラムの内容は，自立の支援というよりは具体物の配布のような現実的対処に偏っていること，支援人材の育成の計画的育成という視点は弱いということであった。こうしたことが研修の効果が上がりにくいことの背景にあると考えられる。

1−5. 研究の目的

そこで本研究では，まず研究者が，親の①レジリエンス，②アタッチメント，③養育スキルを育成することを目的としたペアレントトレーニングマニュアルを支援実施者に提供した上で，そのマニュアルの実施の手立ての提示や解説の機会を設け，継続的に 12 回のスーパーバイズを提供することで，支援実施者の支援能力の向上と，その向上が，支援提供者の支援が親や子どもに子どもにもたらす効果を検討することを目的とする。

2　研究の方法

2−1. 調査対象者

調査対象者は，2023 年 1 月時点で，マニラ近郊にある児童福祉施設で働く支援実施者 5 名とした。対象の支援実施者は男性 2 名，女性 3 名であった。全員が親への支援を行っており，現在の施設での勤務年数はそれぞれ，11 年，8 年，2 年と 1 年未満の 2 人であった。支援実施者の中にはケーススタディワーカー，ソーシャルワーカー，コミュニティ・コーディネーター，牧師など様々な職業の方が存在した。本施設では親からの身体的虐待や心理的虐待，ネグレクトなどを受けている子どもを保護している。

2−2. 倫理的配慮

本施設は Department of Social Welfare and Development（DSWD）の児童保護方針に従って運営されており，今回，事前に研究方法と内容を説明し，そうした基準に抵触しないという判断がなされた上で，研究協力の許可を得た。

対象者には，個人を特定できる情報は公開しないこと，研究終了後データは破棄すること，途中であっても調査への協力を取りやめることが可能なことを説明の上，書面にて同意を得た。得られた録音データは研究者が管理し，研究者以外は再生できないようにした。

2−3. 調査の手続き

90 分のセッションを 2 週間に 1 回行うことで，6 カ月の間に全 12 回のセッションを行う。

また，1 回のセッションは前半と後半を 45 分ずつで分け，各セッションの前半は親のみを対象とし，レジリエンスを育むことを目的とし，そして，

各セッションの後半は親子を対象とし，親の敏感性とタッチングのスキルを育むことを目的としている。

支援実施者に対しては性別，親への訪問支援の経験の有無，施設での勤務年数を基本情報として事前に書面で聴取した。インタビューは，支援実施者に対してプログラムを実施するにあたって感じたこと，親の現状の様子，家族やその他の人との関わりに関する質問を中心にインタビューガイドを作成し行った。また，場所については，施設内の個室で行った。面接者は著者であり，通訳者は日本の大学院を修了し，日本語に堪能でフィリピンの貧困問題に精通しているフィリピン人が行った。面接内容は IC レコーダーで録音し，メモをとりながら実施した。

2−3. データ分析

分析は，Braun & Clarke （2006）を参考に，以下の通りの手順で，主題分析として行われた。①IC レコーダーに記録されたインタビュー内容を文字に起こし，逐語録を作成する，②アンケート内容も文章化して文字データとして活用する。③文字データに対し，文脈の意味や内容を踏まえてコードを割り当てる，④意味内容の近似したコードを組み合わせ，より包括的なサブテーマを形成する，⑤意味内容の近似したサブテーマを組わせてさらに包括的なテーマにまとめる。さらに，著者らが行った分析について，心理学を専攻する博士課程の学生 3 名の協力を得て，設定したコードやサブテーマ，テーマが下位のレベルの意味や内容を反映できているかを確認した。その上で，疑義のあるものや判断に迷うものについては，協議の上，修正を加えた。最後にそれらを全員で確認して最終決定とした。

3　結果

3−1. データの結果

アンケートと面接から得られたデータをまとめると，9 テーマ，40 サブテーマ，284 コードにより構成された（Table 1）。分析の結果は次のようにまとめられた。なお，テーマ【】，サブテーマ《》，コード〈〉で示す。

3−1. 親への効果

まず【プログラムの参加】において，親たちは，ほとんど全ての回で出席していた。さらに〈プログラムで，親のほとんどが子どもと一緒に参加している〉といった《参加》状態であり，〈参加者がより参加的になり，話し合いに参加する自信がついた〉〈トピックに関連した人生経験も共有した〉といった参加者が発信している様子から《参加意欲》が見られるようになっていた。

また，【プログラムの内容】として《自己の感情のコントロール》《ストレスマネジメント》《アンガーマネジメント》《コミュニケーションの重要性》《聞き方》《問題解決》の 6 つが有意義であったことが明らかとなっている。《ストレスマネジメント》スキルや《アンガーマネジメント》スキルを持つことで，《コミュニケーション》を円滑に進めることができる。特に，〈一方的に親だけが喋るんじゃなくて，子どもたちの気持ちも言いたいこともちゃんと聞いて話し合いをするのが一番いい〉と考えるようになり，《聞き方》に変化が現れている。〈お母さんの方から「もしほかに言いたいことがあるなら，言えないんだったら，書いてもいいよ」といってくれる〉といった《聞き方》の工夫をしている家庭も存在した。またそういった関係性であるからこそ，〈1 人で考えるより，家族 5 人で考えたらいろんな解決方法が出てきて選択が広がった〉と《問題解決》を自分たちで取り組む姿勢が見られている。一方で，〈問題解決を実行するのが難しいと思う〉といった難しさや悩みを持っているようであった。

そういったさまざまな知識やスキルの獲得と実践により，実際の【関係性】に変化が生まれている。〈以前は言ったら怒られるので何も話さなかった〉ことや〈一番難しいのは他の人との関係をどうやってうまく作れるか〉などの悩みがあったことが《以前の関係》であった。しかし，現在は，〈関係作りができるようになったことで，関係ができて，その関係を大事にするという流れができた〉といった《関係性の変化》が見られ，さらに《愛着》を通して《信頼関係》に繋がっている。

ただ，プログラムとして実施しているだけでなく，実際に〈難しくても少し努力をして少しずつ学んだことを「こうやるんだ」と自分たちのスタイルで実行する〉といったことから，【応用・汎化】されていることがわかる。

【プログラム構成】においては，《適切性》《時間構成》《教材》《プログラムの有益性・実用性・重要性》が挙げられた。特に《プログラムの有益性・実用性・重要性》では，後半の第 6 回以降に具体的な視点が多く見られるため支援実施者の成果で述べる。

また,【親の様子】として〈トレーニング中はみんな燃えるような向上心がある〉といった《プログラム中の状態》から,〈今はプログラムが終わって3割くらいの人が元に戻っている〉〈3割も7割の人たちに影響を与える〉と《プログラム後の状態》を危惧しており，家庭の自立をコミュニティが阻害している場合があることを示唆している。一方,《支援実施者が考える親への成果》として〈子供を一人の人として見るようになった〉ことで〈親が子どもへの信頼を築くのに役立つ〉と感じていた。プログラムに対する《親の反応》は肯定的でありながらも，まだまだ現状の《親の不安》も挙げられていた。さらに，プログラム中のみに限らず,〈親が家族との協力や交流を意識している〉ことや〈親が本当に幸せを感じ，自分自身と家族のためにやる気を感じていた〉ことから【親の交流への意欲】が活発になっている様子が伺える。

3−2. 支援実施者への効果

【支援実施者自身の成果】として,〈支援実施者として自分もたくさん学んだ〉といった《学び》の実感や,〈理論がわかってよかった〉〈自分のやってることの意味がわかった〉といった発言しており,《理論》を理解して実際の活動と繋げることができている。全体的に〈家族を助けることができるのでよかった〉という《達成感》を得ることができており，このプログラムを実施したことを肯定的に捉えていることがわかる。

すでに《支援方法の習得》がなされている一方で,〈基本的に愛着や信頼関係の問題は簡単なことじゃない〉〈私たちにとっても新しいものだったので全部は難しい〉といった《支援の難しさ》も感じている。また，このプログラムに取り組む《姿勢》として,〈どういうふうに親たちがこのプログラムに利益を得られるか，自分のために，自分の子どもたちのために考えていた〉ことから積極的に取り組んでいたことがわかる。《評価》に関しても，難しいと思うだけでなく,〈家庭訪問するとどういうふうに変わったか評価できた〉といった自分たちの今出来る方法を見つけて取り組んでいた。これは今まで以上に支援実施者が適切な評価を重視していることを表している。

さらに【支援実施者の今後の展望】には《改善点》として,〈アイスブレイクと内容が合わないことがあったので，トピックに繋がるアイスブレイクだと参加者にわかりやすく説明できると思う〉〈参加者がより明確になるような言葉や用語について，もっとディスカッションができるようにしたかった〉といったことが挙げられ，具体的な改善の視点が持てるようになっている。それだけでなく,〈継続的にみんなの歩んでいる道を続けるように，長期的に考えたほうがいい〉といった《今後の懸念》も明示しており，そのために〈もっと発展的な，レベルアップしたトレーニングがあればぜひしたい〉と具体的なスキルを含む《スキル獲得への意欲》も示している。また《フォローアップ》の必要性を多くの支援実施者が感じており，〈親たちにも自分自身でチェックできるようなスキルがあればいい〉といった親が自立に向かえるような支援を目指すことができている。支援実施者としての支援能力の成長があったことがわかる。

【プログラム構成】の《プログラムの有益性・実用性・重要性》を見ると，プログラムの前半は中身の具体性がないものであったが，実施がプログラムの後半になるにつれて，対象が明らかになったり，どういった内容が何に効果的なのか具体的に述べられるようになっている。このことから回数を重ねる毎にそういった細かな部分に気付くことができ，支援実施者のアセスメント能力が向上しているのがわかる。

3−3. 対象児童への効果

【子どもの変化】として〈トレーニングが終わって，もっと自分の考えがしっかりして，具体的にどうやってお母さんをサポートするか，自分で考えるようになっている〉ということが明らかになっており,《自立》に向かう姿勢が現れている。また〈前は家計のことを考えることはなかったけど，プログラムを受けて，親の心配をするようになった〉ように《親に対する心配》の気持ちも育つようになった上で,〈子どもたちも親が変わったから自分の親を尊敬するようになったのも大きな変化〉として《親に対する気持ちの変化》も見られるようになっていた。〈前は子どもたちがハウスペアレントたちに怒られるのが怖い〉というような《不安》を抱えた状態から,〈信頼関係ができたので，子どもたち自身が自由に自分の意見を発言できるようになった〉と《自己開示》出来るようになっていた。〈「それはだめだよ，私たちはこう言う風に習ったよ，怒ってもいいけどちゃんと話し合いしなきゃね」と子供同士が話し合ってるのが見えた〉といった《応用》が起こり,《子ども同士の関係》が良くなったことがわかる。

Table１　支援実施者が語るプログラムの成果（1/2）

テーマ	サブテーマ	コード数	コード
プログラムの参加	参加	26	プログラムで、親のほとんどが子どもと一緒に参加している
			親もよく参加していた
	参加意欲	27	最後の方はみんな内容がわかるようになってきて積極的に参加していた
			参加者は自分の考えを表現し、簡単に共有することができた
			自分の持っている様々な感情を理解しようと最善を尽くしてくれた
			参加者がより参加的になり、話し合いに参加する自信がついた
			参加者全員が協力的で、注意深く話を聞き、指示を出す
			トピックに関連した人生経験も共有した
プログラムの内容	自己の感情コントロール	4	一番価値があると思ったのは自分の感情をコントロールすること
	ストレスマネジメント	6	みんなで話し合うことで、ストレスが解消しやすくなった
			そしてどうやってぶつかっている問題を解決するか、考える上でストレスマネジメントは役に立った
	アンガーマネジメント	11	アンガーマネジメントによって子どもたちに伝えられるようになった
			子どもたちに必ず感情のコントロール特にアンガーマネジメントをいつも子どもたちに教えて、すごい役にたっている
			しかし、このトレーニングに参加してからこのやり方の方がいい、すぐに叱ってはいけない、そういう以前はなかったある程度の基準ができた
	コミュニケーションの重要性	2	やっぱり大事なのはコミュニケーション
	聞き方	7	一方的に親だけが喋るんじゃなくて、子どもたちの気持ちも言いたいこともちゃんと聞いて話し合いをするのが一番いい
			お母さんの方から「もしほかに言いたいことがあるなら、言えないんだったら、書いてもいいよ」といってくれる
	問題解決	10	問題解決の中で、1人で考えるより、５人で考えたらいろんな解決方法が出てきて選択が広がった
			問題解決を実行するのが難しいと思う
関係性	以前の関係	3	以前は言ったら怒られるので何も話さなかった
			一番難しいのは他の人との関係をどうやってうまく作れるか
	関係性の改善	8	関係作りができるようになったことで、関係ができて、その関係を大事にするという流れができた
			家族のコミュニケーションとか、関係がとても良くなった
			子供だけではなく、夫婦間でも関係が良くなった
	愛着	2	私達がいつも使ってる愛着、タッチングをいつもやっている結果
	信頼関係	5	自分の子どもや旦那さん、そして近所の人との信頼関係を作るのが難しいと思う
			信頼関係があるからこそ自由に心を開いて話し合いができている
応用・汎化		4	難しくても少し努力をして少しずつ学んだことを「こうやるんだ」と自分たちのスタイルで実行する
			彼らは学んだことを家族で実践しているからだ
プログラムの構成	適切性	10	彼らの状況にとって、とても重要なトピックだった
			保護者がトピックを理解しやすく、活動に参加しやすかった
	時間構成	6	次回の目標は、時間をオーバーしないように時間管理をすること
			活動の流れがスムーズ
	教材	1	特に、私たちが使用した視覚教材を持っている参加者は、よりよく理解することができた
	プログラムの有益性・実用性・重要性	27	とても役立っている
			自分の愛する人や子どもたちに感謝する方法がわかっていた
			これは、地域社会や入所施設の家族にとっても有益である彼らの感情、行動、表情を理解するのに役立つ
			ロールプレイの多くが実践的で、日常生活にも当てはめることができるため、参加者はロールプレイに容易に共感することができた
			私にとって、このトピックは、彼らが家族や地域社会との関係を強化し、争いを避けるために役立つもの
			親と子どもが経験する可能性のあるストレスにどのように対処するかを知ることは重要である
			親たちは皆、自分たちが話したテーマについて気づき、自分たちが知らないことを知るきっかけになった
			彼らの日常生活、特に自分の問題、社会的な問題に応用できるから

Table１　支援実施者が語るプログラムの成果（2/2）

親の様子	プログラム中の状態	5	トレーニング中はみんな燃えるような向上心がある
	プログラム後の状態	5	しばらく会わない期間があると、前の自分に戻る人がいる
			今はプログラムが終わって３割くらいの人が元に戻っている
			３割も７割の人たちに影響を与える
	スタッフが考える親への成果	22	そのお母さんがもっと子どもたちにサポートとか愛を見せたいからだと感じている
			子供を一人の人として見るようになった
			特に肯定のプロセスにおいて、親の助けになる
			親が子どもへの信頼を築くのに役立つ
			親にとって、子どものジェラシーや感情をどのように知ればよいのか、大変参考になった
	親の反応	6	保護者の反省と反応は肯定的であった
			参加者全員が協力的で、このトピックに興味を持ち、自分の感情についてもっと知るための戦略について学びたがっていることが観察された
			参加者は、前回の活動や、それを日常生活でどのように生かすかを心に留めている
			何人かの親は心を開き、自分の問題を他の人に打ち明けようとした
	親の不安	2	実際に毎日みんながぶつかっている問題は、お金、仕事の問題
	親の交流への意欲	3	保護者が家族との協力や交流を意識している
			親が本当に幸せを感じ、自分自身と家族のためにやる気を感じていた
			忙しい日々を過ごした後、家族との絆を深めるのに役立っている
スタッフ自身の成果	学び	5	スタッフとして自分もたくさん学んだ
	理論	5	理論がわかってよかった
			実行すればするほど、こういうことかとわかった
			自分のやってることの意味がわかった
	達成感	11	このような家族セッションに参加するのは初めてなので、とても参考になった
			家族を助けることができるのでよかった
			はい、　私（スタッフ）の家族に応用できた
	支援方法の習得	3	教えるのは問題なかった
	姿勢	3	どういうふうに親たちがこのプログラムに利益を得られるか、自分のために、自分の子どもたちのために考えていた
	支援の難しさ	3	基本的に愛着や信頼関係の問題は簡単なことじゃない
			私たちにとっても新しいものだったので全部は難しい
	評価	4	結果はどうなっているか、保護者たちが本当に変わったかを判断するのが難しかった
			家庭訪問するとどういうふうに変わったか評価できた
スタッフの今後の展望	改善点	14	たくさんあるのでできるだけそのトレーニングの流れを多分改善することができるのではないかと思う
			アイスブレイクと内容が合わないことがあったので、トピックに繋がるアイスブレイクだと参加者にわかりやすく説明できると思う
			参加者の関心を高め、活動に100％参加させたい
			参加者がより明確になるような言葉や用語について、もっとディスカッションができるようにしたかった
			プログラムは良かったが、このプログラムを実生活に応用する必要があることを強調する必要がある
	今後の懸念	7	次のトレーニングがないと彼らのトレーニングがないと忘れちゃうかもしれない
			それをどうやって（汎化していけば良いか）すれば良いか
			継続的にみんなの歩んでいる道を続けるように、長期的に考えたほうがいい
	スキル獲得への意欲	4	もっと発展的な、レベルアップしたトレーニングがあればぜひしたい
			例えば、言語神経プログラミングとか１０秒深呼吸みたいな他のテクニックがあれば知りたい
			なんでもポジティブに考える方法について知りたい
	フォローアップ	8	フォローアップのケアが必要
			保護者たちにも自分自身でチェックできるようなスキルがあればいい
子どもの変化	自立	3	トレーニングが終わって、もっと自分の考えがしっかりして、具体的にどうやってお母さんをサポートするか、自分で考えるようになっている
			今は準備中、心を準備して本当に自立できたらお母さんをサポートしたい
	親に対する心配	5	前は家計のことを考えることはなかったけど、プログラムを受けて、親の心配をするようになった
			親の心配をして自分もできるだけ自立して仕事を見つけるとお母さんに負担をかけない、迷惑をかけない
	親に対する気持ちの変化	1	子どもたちも親が変わったから自分の親を尊敬するようになったのも大きな変化
	不安	1	前は子どもたちがハウスペアレントたちに怒られるのが怖い
	自己開示	1	信頼関係ができたので、子どもたち自身が自由に自分の意見を発言できるようになった
	応用	2	「それはだめだよ、私たちはこう言う風に習ったよ、怒ってもいいけどちゃんと話し合いしなきゃね」と子供同士が話し合ってるのが見えた
	子ども同士の関係	2	子どもたちの関係がものすごく良くなった

4　考察

以上のプログラムの成果より，支援実施者の支援能力の変化においては概ね以下のように整理できるであろう。

4−1. 自己認知の向上

理論を理解して実際の活動と繋げることができていることから，以前は理論を理解せずに支援活動を行っていたこと，さらに理解して支援することの重要性を実感しており，自己についての認知が向上していることがわかる。

4−2. アセスメント能力

支援場面において支援実施者が適切な介入を行うために，多面的なアセスメントが必要とされる。今回，アンケートやインタビューの中で，親自身・子自身・家族・夫婦・親同士といったさまざまな形で対象を捉え，参加している様子だけでなく，日常生活での状況などの多方面を見とっていることがわかる。また，今ある評価方法では正確な現状をアセスメントできないと判断した場合，家庭へ訪問して適切なアセスメントを目指す様子がうかがえた。このように，実際に支援を行なっていく中で，家庭のニーズが多面的に把握されていた。

4−3. 意欲的姿勢

プログラムを実施した上で必要だと感じた改善点や次回以降のプログラムに求めることの主張が大いに挙げられた。これにより，今回のプログラムで満足することなく，今後も家庭の変化のために活動していきたいというような支援に対する意欲的な姿勢が見られた。

4−4. 分析能力

適切な介入として，現状・ニーズなどのアセスメントに基づいて，何が効果をもたらしているか，今何ができるか，今後どう変えるべきかといった具体案を考えていることがわかる。時間配分などの実際のプログラムの構成から，自分たちの活動の振り返り，どんな理論がもとになっていてどこが重要なのかといったことを考えていたことが明らかとなった。

4−5. 成長を可能にした要因

このような支援実施者の変化が起こった要因として以下の 4 つが考えられる。

まず一つ目は，支援実施者がこのプログラムを実施するにあたって，支援実施者同士のディスカッションすることで相互に学び合う場が生まれた可能性があるということである。プログラムをより良いものに改善しようとする際に，支援側の交流はおのずと生まれ，自分一人では気付くことのなかったお互いの意見を共有することで，より深い親理解や分析を可能にしていると思われる。

二つ目は，このプログラムが理論的背景に沿った活動であったために，支援実施者がそのことを意識しながら活動できたことである。全ての活動において活動の意味を明示していることで，どのようなスキルを教えているか理解した上で実施することは支援実施者の自己認知や意欲的姿勢に影響するであろう。

三つ目は，今まで良い状態ではなかった親の変化を身をもって感じたことで，親や子どものニーズを理解したことである。元々，研究の目的としてもあるように，親のサポートを強化することで，子どもが施設だけでなく家でも，より良い成長ができるようすることが支援実施者の目標であった。しかし，どのような状態が子供が成長できる家庭なのか具体的なニーズが理解できていなかったため，最初は食糧支援などを重視していた。しかし，心理社会的分野からも親を支援できることを実感することで今まで感じていたものとは違ったニーズに気付くことに繋がっていると考えられる。

四つ目は，そのように精神的に自立した良い状態の親のイメージができるようになることで，支援実施者の今後の目標の設定がより明確になったことである。生活のための援助をして親を助けるだけではなく，親が自分達の力で家族を支えられるように，自立に向けて助けるという具体的な目標を持てるようになることで，支援実施者の変化が起こったことが考えられる。

4−6. 課題

以上のような変化はあったものの，今回のプログラムでは 3 つの課題があると考える。

まず一つ目は，より深い理論研修の必要性である。今回参加した支援実施者は理論についての教育を受けているわけではないため，理論的背景を全て理解しているわけではない。また理論を学ぶことの難しさや時間の確保も課題である。

二つ目は，フォローアップの研修が足りなかったために，継続が難しいと感じていたことである。今回のプログラムを実施して満足することのないよう，親と支援指導者に対しての適切な評価を再検討し，その評価を本にフォローアップをどのようにしていくのかということについて，方法を確立し研修で身につけることが必要がある。

三つ目は，経済的な不安に対するアプローチが

欠如していたことである。今回のプログラムはレジリエンス，愛着，養育スキルの獲得を目指した心理社会的なアプローチで，当初予想していた以上の効果を上げることができた。しかし，心理社会的な支援が効果を上げたとしても，親には経済的な不安が残り，支援者もそういった不安を懸念していた。こうした実態は，親のための経済的な支援プログラムの必要性を示唆するものであり，心理社会的支援プログラムと統合的に実践することによって，親の包括的な支援が可能になると考えられる。

謝辞

本調査に当たっては，SPECS の支援実施者の方々や子ども達, その家族，また，コーディネーターを務めて下さった現地 NGO である HOLPFI の現地事業運営責任者，酒井保氏，および酒井慶子氏，Annie Asi 氏, Kaira De Lara Generato 氏, さらに通訳をして頂いた, Yel Geronimo 氏の御協力をいただいた。記して深謝の意を表する。

付記

本論文は令和 5 年度に広島大学大学院人間社会科学研究科に提出された修士論文の一部を抜粋し，加筆，修正したものである。

引用文献

Recognition, Validation and Accreditation in Philippines（2023）
https://www.uil.unesco.org/en/articles/recognition-validation-and-accreditation-philippines
（2023 年 12 月アクセス）

ユニセフ
https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_act04_07.html（2023 年 12 月アクセス）

ユニセフ
https://www.unicef.or.jp/news/2017/0120.html（2023 年 12 月アクセス）

西垣伸悟・栗原慎二　（2021）　フィリピンにおける虐待経験のある親の生活実態に関する調査：虐待防止プログラムの開発に向けて　学校教育実践学研究，27, 169-175.

Asian Development Bank ”COUNTRY PARTNERSHIP STRATEGY for the Phippinies 2018-2023”
https://www.adb.org/documents/philippines-country-partnership-strategy-2018-2023
（2023 年 12 月アクセス）

Braun, V., & Clarke, V.　（2006）. Using thematic analysis in psychology. Qualitative research in psychology, 3（2）, 77-101.